

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第 12 回

第 4 章 宮川ひろ

その 2 『春駒のうた』、『先生のつうしんぼ』、そして、『夜のかげぼうし』
(後半)

これまでの三つの章では、坪田譲治先生、前川康男先生、今西祐行先生、あまみきみこさんのことを書いた。この先生がたと母宮川ひろのかかわりを軸に書いたから、もう、すでに、母のデビュー作『るすばん先生』(ポプラ社 1969 年)のころまでを述べている。

第 4 章では、宮川ひろ(1923~2018 年)のデビュー以降のさまざまを作品に即して振り返る。母もまた、私の出会った児童文学者にほかならなかった。

「ブランク」の心細さ、「ブランク」の緊張

前回も引いたが、インタビュー「『春駒のうた』の宮川ひろさん(談)」(日本児童文学者協会編『作家が語る わたしの児童文学 15 人』につけん 2002 年所収)で、母は、『春駒のうた』を書いてしまったあと、「もう心の中がからっぽになって、つぎの『四年三組のはた』(偕成社、75 年)にたどりつくまで、ブランクがつづきました。」(カッコ内原文)と語っている。

『春駒のうた』(偕成社)は、1971(昭和 46)年 3 月の刊行、私の中学校卒業間近だった。そして、高校に進学したばかりの 4 月、第 17 回青少年読書感想文全国コンクールの課題図書に選定された。

同コンクールの課題図書に関しては、このころから批判がある。課題図書の選定や流通への疑問や批判を述べた山中恒「課題図書の存立構造」(『教育労働研究』1973 年 10 月、『児童読物よ、よみがえれ』晶文社 1979 年所収)などを読み直すと、あらためて考え込まざるをえない。(注 1)

私は、15 歳だったが、課題図書に選定されれば相応の部数が増刷されることを知っていた。『春駒のうた』が課題図書になったから、入学したばかりの高校をきっと卒業できると思った。うれしかった。第一志望の私立高校が不合格で、第二志望の都立高校に入学したので、学費の負担はそれほどでもないと考えていたけれど、やっぱり不安だったのだ。

わが家の経済は、大きく息をついた。母もずいぶんほっとしたはずで、母のいう「ブランク」は、ほっとしたことが招きよせたものかもしれない。その「ブランク」は、前回紹介した 1973(昭和 48)年 2 月の長崎源之助先生あての手紙で母がもらった心細さや新しい緊張を生んだ。——「あと、いくつ書けるのだろうと、やっぱり主婦の作文でしかなかったことを思い知って心細くなっております。」(同書簡)私が高校に入ったころ、父の自宅療養は 3 年めに入った。母は私に「大学は浪人してはいけない」といい、私は、現役で第二志望の大学に進学した。

『先生のつうしんぼ』の発見

インタビューで、母は、『四年三組のはた』まで「ブランク」がつづいたと語っているけれど、母が新たに何かを発見し、つかみとったのは、そのまたつぎの作品『先生のつうしんぼ』（偕成社 1976 年、小野かおる絵）だと思う。これは、私が大学 2 年生のときの刊行である。『先生のつうしんぼ』が発見したものは、この連載の第 3 回で『るすばん先生』という方法」の見出しで書いたことにかかわる。

「先生」に異質な「るすばん」をぶつけるのは、文学理論でいう「異化」の仕事で、日常が急に「見なれないもの」になる。これが宮川ひろの方法である。（中略）『るすばん先生』という方法が、やがて、多くの読者を獲得した『先生のつうしんぼ』（偕成社 1976 年）なども生み出す。子どもたちを評価する「先生」が評価される「通信簿」である。これは、読者の驚きを引き出し、読者は、学校を描く日常物語を「見なれないもの」として体験することになる。（カッコ内原文）

デビュー作『るすばん先生』（ポプラ社 1969 年）は、たしかに「異化」の仕事だが、産休補助教員の木村先生の思想が物語を動かしていくところがある。もうすぐ赤ちゃんが生まれる、もうひとりの木村先生が担任をすることになった四年三組の子どもたちを描いた『四年三組のはた』でも、木村先生や女性の校長先生が子どもたちをリードして物語がすすむ。子どもたちも、調子をくずした木村先生を心配して、クラス全員で水天宮に安産祈願に行ったりもするのだが。

ところが、『先生のつうしんぼ』で「異化」をにない、物語を動かしていくのは、小学 3 年生の松木吾郎である。学級会で「給食のおかずは、のこさず食べましょう」と決めたのに、担任の古谷先生は、ひそかにカレーのにんじんを残している。——「先生は、スプーンにのせたにんじんを、いま口にいれるところでした。入れたとおもったら、ポケットからちり紙をだして、左手で口をふきました。」

あっ、吾郎はおもわず、声をあげそうになりました。

先生は、口をふいたのではなくて、いちど口に入れたにんじんを、ちり紙のなかへはきだしては、ポケットにしまっているようです。

吾郎は、じぶんがわるいことでもしたように、顔を赤くして、あわてて目をふせました。だれかに気づかれてはいないかと、そうっと、あたりを見わたしました。

みんな食べることにむちゅうで、先生を見ていた人はいなかったようです。ほっとしたら、なんだかおかしくなって、ひとりで、にやっとわらってしまいました。

（中略）

ばらしたら、先生がかわいそうだともおもいました。それよりも、そんなひみつは、じぶんだけでしまっておきたいともおもったのです。

でも、ただだまっているだけでは、おもしろくありません。そうだ、先生のつうしんぼをつけてやろう……

宮川ひろの方法

『日本児童文学』1984（昭和 59）年 4 月号は「特集・現代児童文学の方法」で、巻頭は、安藤美紀夫・古田足日の対談「現代児童文学の方法」をめぐって」だ。対談は、数多くの作品にふれながら進行していくが、何度も宮川ひろの話になる。――「七〇年代での売れている本というような言い方をしたら、宮川さんのものは、売れる理由があって売れたというふうに思うんだよね。」（古田）「宮川さんのものの中に、（中略）子どもが感じている要求をとらえるという、それが宮川さんの特徴の一つだと思う。（中略）同時にそれがまたあるたのしさをもって表現されている」（古田）

安藤 宮川さんの作品を読んでいると、フィクションの原則を踏まえている。非常にオーソドックスな葛藤があり、その高まりの中で大団円を迎える。大団円といっても彼女の場合のは非常に狭い範囲の、その場の解決という意味の大団円だけれど、そういう意味で、何というのかな、昔話の持っているストーリー性の原則みたいなものを、彼女の作品というのはきちんとおさえられている。その中でシチュエーションとキャラクターは変わっていくけれども、その原則はほとんど変わっていないんじゃないか、全体を読み直してみないとちょっとわからないけれど。

古田 宮川ひろ論というのも、もっときちんと書かれる必要があると思うね。（注 2）

話のなかでは特に作品のタイトルがあげられないのだけれど、踏まえているのは、『四年三組のはた』や『先生のつうしんぼ』だろうか。ふたりは、宮川ひろの方法に接近しようとしている。

もう 40 年前の対談だが、いまなら、安藤美紀夫先生、古田足日先生に「異化」ということばで宮川ひろの文学の方法について話したい。しかし、安藤先生は早く亡くなり（1990 年没）、古田先生もことしで没後 10 年をむかえた。

宮川ひろの文学について「異化」ということばで考えるようになったのは、最近のことだ。

2018（平成 30）年 12 月 29 日に母が亡くなったあと、日本子どもの本研究会の機関誌『月刊子どもの本棚』の 2019（令和元）年 6 月号が特集「宮川ひろ 子どもたちへのあたたかなまなざし」を組んだ。何人かの方の追悼エッセイのほかに少し長い文章をのせたいということで、私に依頼があった。これが 400 字原稿用紙なら 12、3 枚の「宮川ひろという人」で、私のはじめて母について書いたものだ。

母があまんきみこさんらと同人雑誌『どうわ教室』を創刊して（1966 年 11 月）、

書きはじめたころから、それは私の小学校高学年のころからということになるが、母の原稿を読んで意見をいつてきた。しかし、児童文学の批評・研究の勉強をはじめた20歳前後からあと、母が亡くなるまで、母の作品について書くことはひかえてきた。それは、やはり、「身内」の仕事だからだ。

その「宮川ひろという人」では、「宮川ひろは、リアリズムの作家だから、ふるさとの体験、戦争体験、学校や教室での体験を素材に書いていった。ただ、その作品には、体験を見直す視点が織り込まれていたと思う。」と書いた。『先生のつうしんぼ』や『しっばいにかんぱい!』（童心社2008年）を例にあげている。

その後、宮城教育大学の児童文学を活用した教員養成プログラムの開発をめぐる共同研究の一部として、宮川ひろに関するインタビューにこたえるなかでは、こう述べている。——『先生のつうしんぼ』などは、「先生のつうしんぼ」という言葉を発見した時に作品が一つの輪郭を持ったのだろうと思います。「先生のつうしんぼ」とか、「0てんにかんぱい」とか、矛盾したことを言う傾向があります。弁証法的というか、零点とはつまらないことなのに、乾杯という喜ばしいことをぶつけてきて、矛盾しているその先に、正反合ではありませんが新しい世界があるという感じです。タイトルは割と上手でした。（中略）タイトルというのは、ある種のアイデアですから、アイデアが新しい世界を創るということだったともいえます。」（中地文・大木葉子「宮川ひろの児童文学と教育—宮川健郎氏に聞く—」『宮城教育大学紀要』2021年1月）

いずれもまだ、「異化」ということば、考えかたにたどりついていない。「異化」を最初に持ち出したのは、2021（令和3）年2月20日、母が亡くなって2年あまりのち、ふるさとの群馬県沼田市（母の生家は、現在、沼田市利根町）の名誉市民顕彰をうけた日だ。顕彰式のあと、私が市民の方たちに「母のこと—宮川ひろの人生と作品、そして、亡くなるまで—」と題して60分の講演をしたときのことだ（於・テラス沼田）。

「異化」とは何か—2021年2月、沼田市での講演より—

講演のレジュメには、「宮川ひろ文学の方法」という見出しの部分があり、「体験を見直す視点は、どのようにして生まれたか。」「異化」ということ（見慣れぬものにする）などと記されている。「異化」について説明するために、ワークシートも用意した（ワークシートは縦書き）。（注3）

をりとりて○○○○○○○すゝきかな

飯田蛇笏（一八八五～一九六二年）

- （a） ばらりとかるき
- （b） ばらりとおもき
- （c） はらりとかるき
- （d） はらりとおもき

すすきを折りとったときのようなすを詠んだ俳句である。○○○○○○○の7文字に(a)～(d)の何が入ると思うか、100人あまりも集ってくださった参加者に考えていただいた。(c)を選んで、手をあげてくださった方が多い。お聞きしてみると、(c)が一番自然だとおっしゃる。ところが、飯田蛇笏の句は(d)で、「をりとりてはらりとおもきすゝきかな」だ。みなさん、えっ?という顔をされた。

たしかに、「はらりと」のあとに「おもき」とくると、びっくりする。でも、すすきというのは意外に重いのかなとか、私たちは、ようやくすすきのことを考えはじめる。「はらりとかるき」だったら、自然かもしれないが、ちっとも驚かないで見すごしてしまう。これが「異化」だ。「異化」は、ロシア・フォルマリズムの理論家、ヴィクトル・シクロフスキー(1893～1984年)が言い出した概念である。

松木吾郎は、「そうだ、先生のつうしんぼをつけてやろう……」と考える。学期ごとに通信簿をつける、その「先生のつうしんぼ」である。「先生」と「子ども」の関係や「学校」が急に新しいものとして見直されることになる。ここに作品の魅力があった。

『先生のつうしんぼ』は、宮川ひろの作品のなかで、もっともよく読まれた。そのせいもあってか、その後、『おかあさんのつうしんぼ』(1979年)、『おとうさんのつうしんぼ』(1981年)、『おばあさんのつうしんぼ』(1987年)、『おじいちゃんのつうしんぼ』(1989年)と、『つうしんぼ』のタイトルの作品がいくつも書かれた。版元は、いずれも偕成社。このおかあさんやおとうさん、おじいちゃんは、みな教員で、それを家族である子どもの視点から描くものになっている。ただ、いくつも書かれるうちに、子どもが大人の通信簿をつけるということが「見なれたもの」になっていって、「異化」の効果をうしなっていっただと思う。

母は、『先生のつうしんぼ』のヒントは、日本作文の会の機関誌『作文と教育』に掲載された戸田唯巳先生のエッセイ「先生うまくやるね」だったと書いている(『先生のつうしんぼ』と戸田唯巳先生『赤旗』1983年2月6日)。戸田唯巳先生(1919年～没年不詳)は、兵庫県西宮市の小学校の先生だった方で、作文教育の実践家として著名だ。著書も多い。

戸田先生は、『先生のつうしんぼ』に書かれた古谷先生と同じように、給食で食べられないものを紙にひそかに吐き出していた。戸田先生は、クラスのヨッチちゃんから手紙をもらう。——「先生、きょうもうまくやったね。ぼく、ナイショにしといてあげるから、うまくやらんとあかんよ」(引用は宮川ひろ『母からゆずられた前かけ』文溪堂1993年による。以下も同じ)そしてまた、ヨッチちゃんから、いそぎの手紙が届く。——「ミチ子ちゃんがかんづいたらしいよ。先生、もうしょうじきに、みんなにいったほうがいいのとちがう?」母は、「ヨッチちゃんの目を借りようと思ったら、作品の輪郭がうかびました。」と記している。

「異化」の効果をうしなった、その後の『つうしんぼ』シリーズは、むしろ、この戸田先生のエッセイのように、母が出会った教室のエピソードや、創造的な教育

実践を作品化する装置として機能していったと思う。それぞれの「あとがき」には、話を聞いた方たちのお名前や参考文献が数多くあげられている。

1970年代から80年代にかけて、『つうしんぼ』シリーズが書かれていた時期に、一番はじめの『先生のつうしんぼ』が学校を「見られないもの」にする「異化」の仕事だったことを、もし、母に話すことができたなら、作品は変わっただろうか。

1989（平成元）年刊行の『なくなったつうしんぼ』は、「つうしんぼ」に「なくなった」をぶつけた作品で、「異化」の力を少し回復したように見える。両親が離婚して、もともとの家庭をうしなった、4年生の保や、手さげに入れて持ち歩いていた通信簿をなくしてしまった久保正子先生を描く。子どもも大人も、「なくなった」喪失をどうしたら埋められるのかが考えられている。

「戦争はすきかい。」

『四年三組のはた』や『先生のつうしんぼ』が刊行されたころ、母は、はじめての連載にも取り組んでいた。『びわの実学校』第72号～第80号（1975年11月～77年3月）の「夜のかげぼうし」だ。単行本は、1978年に講談社から刊行されて、第8回赤い鳥文学賞を受賞した。1944（昭和19）年、東京府蒲田区立出雲国民学校の子どもたちを引率して静岡に疎開をした体験をもとにした創作である。『びわの実学校』第30号（1968年8月）に発表した同じタイトルの短編を発展させたものだ。

単行本『夜のかげぼうし』の「あとがき」には、太平洋戦争末期の学童疎開の生活をどのように書いたらいいか、戦争をどうとらえたらいいか、わからなかったと記されている。――「しまいには開きなおって、戦争はえがけなくても、疎開の生活を教室と思って、教室をえがくつもりで書くことにしました。」作品は、一貫して、主人公である4年生の信年の視点で描かれている。

前回から紹介している、母が長崎源之助先生にあてた手紙は、長崎先生から『やまびこ村のふしぎな少年』（実業之日本社1972年）と『東京から来た女の子』（偕成社1972年）をいただいた、そのお礼状だった。母は、長崎先生の初期の『おかあさんの顔』（三十書房1964年）に収録された短編や『あほうの星』（理論社1964年）などは「割合に視点の高いところから、かかれていたと思うのですが、「ゲンのいた谷」（実業之日本社1968年―宮川健郎注）あたりから、ずいぶん違ってきて、」と書いている。今回の二つの作品になると、「新しい世界を全くあぶなげないところまで築き上げられた」としている。長崎先生の高い視点から書かれていた、つまり、作者の視点によった作品が、「子ども読者の文学」になったということだろう。

宮川ひろの『春駒のうた』も、視点の高い「作者の文学」だったと思う。「子ども読者の文学」への転換は、『先生のつうしんぼ』がはたした。『先生のつうしんぼ』と同時期の『夜のかげぼうし』は、作者の学童疎開引率教師の体験を描いた自伝的な作品でありながら、それでも、「子ども読者の文学」になった。

『夜のかげぼうし』の世界に違和感を持ち込むのは、子どもたちが疎開した寺のある村のお堂で暮らすぼうさまである。ぼうさまは、信年や同じ班の同級生、康平に「ぼうやたち、戦争はすきかい。」とささやく。村人たちは、ぼうさまを徴兵忌避者だと、うわさするが、信年たちは、ぼうさまが、むすこ5人を戦死でうしなったことを知る。

「戦争はすきかい。」——この時代のなかでは、おそろしいことばである。しかし、信年や康平は、折々にこのことばを思い出すのだ。(つづく)

(注)

- 1、『日本児童文学』1973（昭和48）年7月号の「特集・課題図書とは何か」なども参照のこと。
- 2、この対談よりあと、安藤美紀夫先生は偕成社文庫版『先生のつうしんぼ』（1984年）の「解説」を、古田足日先生は同文庫版『おとうさんのつうしんぼ』（1995年）の「解説——宮川ひろの世界」を執筆する。
- 3、このワークシートは、「第3章 あまんきみこさん」に登場した西郷竹彦先生の俳句の授業（1991年10月12日、青森県十和田湖町立奥入瀬小学校6年生のクラスでの実践）をもとにつくったものである。私は、この授業をビデオで見た。西郷先生は、蛇笏の句の「はらりとおもき」を「木に竹をつぐような」と評している。まさに、「異化」ということだ。この西郷先生の授業は、私の著書『国語教育と現代児童文学のあいだ』（日本書籍1993年）や『物語もっと深読み教室』（岩波ジュニア新書2013年）でも紹介している。